

# フードバンク活動のリスク要因についての一考察

－先行研究の整理を通して－

## Study of the risk factor food bank activities Organization of previous research

原田佳子<sup>\*1</sup>・糸山智栄<sup>\*2</sup>・三田善雄<sup>\*3</sup>

Yoshiko HARADA, Tie ITOYAMA, and Yoshio MITA

### 1. はじめに

この数年で日本におけるフードバンク活動実施主体数は、著しく増加している。今後はそれらの諸活動がいかに継続的・安定的に展開されていくかがより重要なテーマになってくる。そのためには活動を阻害する潜在的なリスクを顕在化し、最小化する必要がある。本稿では、フードバンク活動におけるリスクマネジメントを確立するために、まず諸先行研究で指摘されている諸リスク要因について、若干の紹介と考察を試みたい。

#### 1) 流通論

小林は、「フードバンク活動における食品ロスの再分配と流通機能－セカンドハーベスト名古屋のケーススタディと欧米韓との比較分析－」（2012.6）において、流通論における機能的アプローチを背景に、フードバンク活動（以下FB活動）を交換機能、ロジスティクス機能、危険負担のシェアなどの補助機能などの諸機能から分析し、食品流通における需給ギャップ等から生じる食品ロスを再配分する流通機能の一部としてFB活動をとらえ、その特徴と国内での普及課題を明らかにしている。なかでも、ロジスティクスに特化した、以下の4つの指摘は示唆に富むものであると考える。

- ・ 世界のフードバンクは、どこも無償で食品を提供しているが、多額の費用がかかるロジスティクス整備と費用負担方法にはばらつきがある。取引数量を増やすだけでなく、栄養バランスを考慮した食糧援助には肉類や乳製品を扱うコールドチェーンが必要である。

- ・ 貧困車の食糧調達能力（エンタイトルメント）を高めることを目的にするならば、一方的な支援となりがちなフードバンクのロジスティクス整備は慎重に検討すべき。
- ・ 一時的な食糧安全保障に多額の投資をすれば、サンクスコスト化する懸念もある。

#### 2) ソーシャルビジネス

小林は、「ソーシャルビジネスによるフードセキュリティ構築の可能性」（2011）において、様々な社会的課題を市場として捉え、その解決を目的とするソーシャルビジネスの視点からとらえている。またソーシャルビジネスに求められる「社会性」「事業性」「革新性」の3つを要件から、それぞれ1）「社会性」：食品ロス問題と福祉問題を同時に解決する、2）「事業性」：米国などでは物流に関する費用を利用者から事業費として徴収、3）「革新性」：食糧を無償で融通するとFB活動を評価し、FB活動のソーシャルビジネスとしての特徴を定義している。またその上で、2HJと2HNとを比較分析し、地方FBの事業性が低さを指摘。そして地方でもフードバンク事業が慈善型の非営利活動から事業型のソーシャルビジネスへと転換することが求められるとしている。

#### 3) 食糧問題

小林は、「循環型フードシステム構築における食糧問題との相互依存性－地方展開するフードバンク活動を事例と

してー」(2011)において、生源寺の食糧問題の概念を応用し、FB活動をそれぞれフードセキュリティ(食の量的確保)とフードセイフティ(食の質の確保)の視点から整理したうえで、食品リユースにおける食糧問題の相互依存性について論じている。

たとえば食中毒発生リスクと食品ロス発生リスクの相関性を、『フードセイフティの概念に含まれる「食中毒対策」の徹底は食品ロスの増加を誘発することから食の量的確保である「フードセキュリティ」とトレードオフの関係となる』と指摘している。また「食糧安全保障」上のリスクと「食糧保障」上のリスクの相関性について、「賞味期限切れの備蓄食糧を回収し、フードバンクが非市場で貧困者に再配分する事例」を通して、不測の事態に備えている「食糧安全保障」に「食糧保障」が依拠している一方で食品ロス削減の観点からは「食糧保障」が「食糧安全保障」に貢献していることを指摘し、部分的な相互依存関係としてセイフティーネットと食品ロス削減との関係でのリスクバランスを、食糧保障と食糧安全保障という食糧問題の概念から顕在化している点は非常に特徴的だと考える。

#### 4) 贈与経済

小林が、「韓国における食の過剰性とフードバンク活動の贈与経済への展開」において、FB活動の食品ロス対策から福祉対策への移行に「贈与経済論」の視点から評価を加えている点も非常に興味深い。食品ロス対策を「見返り」を求めない「片務的贈与」とし、一方で「過剰ではあるものの食品ロスではないもの」の寄付という韓国での寄付行為の変化を指摘し、返礼を期待しながら通常の食品を寄付する「交換贈与」への移行を確認している。

また、日本においてもいずれ韓国のように「栄養の偏り」や「食の嗜好性」、そして国内の地方FBで課題となっている「人件費の捻出」などを理由に、いずれ食品ロスの再利用だけでは福祉事業としてのFB事業が行き詰る可能性を指摘している点も見逃せない。

## 2. 最後に

ここでは小林論文を通して、そこで指摘された、流通論、ソーシャルビジネス、食糧問題、贈与経済という視点からのリスク要因分析についての紹介と若干の考察を試みた。

小林のリスク要因の相関性や背景構造に踏み込んだ分析と課題提示は、FB活動の持つリスクの複雑性を示すとともに、その活動の持つ可能性の大きさも示していると考える。実際に、今回の先行研究の整理を通して、筆者が感じた「食品利用」＝「社会参加」という相関性は、食品ロス対策という前提のもので成り立つ「交換贈与」の可能性を指摘するものであるかもしれないが、これも「贈与経済」というテーマでの小林の分析があったからこそ顕在化したものかもしれない。

総じて、FB活動におけるある程度の共通課題は見えてきてはいるが、日本でのFB活動はまだ未分化な部分も多く、議論の余地もたくさん残されているということを実感している。引き続き、岡山でのFB活動実践を通じて、共通リスクの顕在化とともに、リスクマネジメントの糸口をしっかりと探っていきたいと思う。

#### 参考資料

- 1) 小林富雄(2012)「フードバンク活動における食品ロスの再分配と流通機能—セカンドハーベスト名古屋のケーススタディと欧米韓との比較分析—」農業市場研究 第21巻第1号 pp. 35-41
- 2) 小林富雄(2013)「ソーシャルマーケティングによるフードセキュリティの構築と課題—東日本大震災におけるフードバンク活動を中心に—」流通、No. 32 pp. 27-34
- 3) 小林富雄(2011)「循環型フードシステム構築における食料問題との相互依存性—地方展開するフードバンク活動を事例として—」『フードシステム研究』第18巻第3号、pp. 291-294 *‘Interdependence of a food loss and a food problem - Case study of Food Bank spreading locally-’*
- 3) 小林富雄「韓国における食の過剰性とフードバンク活動の贈与経済への展開」
- 4) マルセル・モース『贈与論』ちくま学芸文庫 2009
- 5) 桜井英治『贈与の歴史学 儀礼と経済のあいだ』中公新書 2013
- 5) 内田樹 岡田斗司夫 FREEex 『評価と贈与の経済学』徳間書店 2013
- 6) K. E. ボールディング『愛と恐怖の経済—贈与の経済学序説』佑学社 1974